

2013 年度ドクター研究員プロジェクト活動実績報告書

氏名	木戸 紗織
(プロジェクト・テーマ名) ルクセンブルク学研究会	
(研究活動実績) <p>今年度、本プロジェクトは研究発表会の開催および機関紙『ルクセンブルク学研究』第4号の刊行を行った。本号には、論文1編、研究ノート2編、書評1編が寄せられ、その他、博士論文報告と2007年より開催している過去13回の研究発表会の概要が掲載されている。これを100部印刷し、国内およびルクセンブルクの大学や研究機関へ配布した。詳細は以下の通り。</p> <p><研究発表会> (参加者10名)</p> <p>日時：2013年7月27日(土)</p> <p>場所：立命館大学 朱雀キャンパス</p> <p>発表者：</p> <p>中村 依莉子 (一橋大学大学院) 「ルクセンブルク国家形成期における、言語とナショナル・アイデンティティの関係の萌芽」</p> <p>木戸 紗織 (研究代表者、UCRC доктор研究員) 「多言語社会における言語選択と領域(domain)の関係—ルクセンブルクの教会を事例として—」</p> <p>田村 建一 (愛知教育大学) 「スル型表現とナル型表現—英語、ドイツ語、フランス語、ルクセンブルク語の対照—」</p> <p>第一の発表(中村)は、現在の言語使用の枠組みを築いたとされる1843年の初等教育法改正をめぐる議論を通して、ルクセンブルクの多言語性の成立過程を明らかにしようとするものである。発表者は、唯一のロマンス語であるフランス語が多言語社会の形成に何らかの役割を果たしたのではないかと考えており、本格的なフランス語学習の導入が議論された1843年の初等教育法改正に注目している。続く第二の発表(木戸)は、昨年度大阪市立大学へ提出された博士論文をもととした発表である。本発表でも、フランス語の使用について特殊なケースがあることが報告され、先の発表と関連して、ルクセンブルクの三言語併用におけるフランス語の特異性が浮き彫りとなった。最後の発表(田村)では、英語、ドイツ語、フランス語、ルクセンブルク語でどの程度スル型表現(人間が活動したり認識したりする形の表現)が用いられるかという調査を通して、ルクセンブルク語の特徴を明らかにすることが試みられた。</p> <p><機関紙『ルクセンブルク学研究』第4号></p> <p>論文：</p> <p>田村 建一「認知をとまなうスル型表現の使用—ルクセンブルク語を中心とする対照研究—」</p> <p>研究ノート：</p> <p>中村 依莉子「ルクセンブルクにおける1843年教育法改正とフランス語」</p> <p>小川 敦「言語の権利の変化—ルクセンブルクの事例より」</p>	

書評：

木戸 紗織「田原憲和著『ルクセンブルク語入門』」

上記のうち2編は、研究発表会での発表を基にしたものである。田村氏の論文は、『星の王子様』と『ピノッキオ』をもとに、スル型表現という観点からフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語、英語、日本語、イタリア語訳を丁寧に比較対照した論文である。中村氏、小川氏の研究ノートは、多言語都市ルクセンブルクの特長でもあり課題でもあるとされる複雑な言語使用について、言語教育を行う側とそれを受ける側それぞれの視点から取り組んだものである。そして、木戸（研究代表者）による書評は、田原憲和氏によって2013年に大学書林より出版された『ルクセンブルク語入門』に関するものである。本書は日本初のルクセンブルク語の文法書であり、世界的にも先駆的な試みである。